

―モンゴル紀行（八）―

山羊の乳

浦野 裕司

南ゴビの大地は乾いているが、迎えてくれる人々の心はいつも潤いに満ちている。七度目となる今回の南ゴビ・ハンホンゴル村への旅も、さまざまな人々からたくさんの潤いを感じることができた。

いつものことながら、モンゴルへ旅立つ前は、落ち着かない気分が続く。とにかく荷造りが大変だ。訪問するたびに知人が増えて、そのために土産を用意する。遊牧民の知人が多いから、行ってもだれに再会できるか予定が立たない。あの人

にこの人にと、もしかしたら再会できるかもしれない人々への土産物を揃えるのに、出発前日まで悩まされる。ハンホンゴル芸術専門学校への土産も併せれば、スーツケースの半分は土産に占有されてしまう。

ウランバートル行きは直行便はたいいて遅れる。前回の旅では、定刻から八時間遅れの離陸だった。今回は関東地方への台風の接近の予報で、飛行機が飛ぶのかどうかさえ気がかりで、前日はよく寝られなかった。加えてシンガポールから

ウランバートルへ向かうメンバーもいたので、ウランバートルに着くまで不安な時間が続いた。

心配した台風は進路がはずれたため、MIATモンゴル航空502便は無事にウランバートルへ向かう。定刻から遅れること一時間半ほどだが、これならまあ、誤差の範囲だ。午後八時過ぎにウランバートル郊外のチンギスハン国際空港に着。空港では、今回初めてお世話になるモンゴル人ガイドのアザーさんと、ひと足先に着いたシンガポール在住のマッチャンがにこやかに迎えてくれた。今回の旅のメンバーは、この二人の男性とカオルとユキさん、バーバラ、ミドリの人々の女性、それに私の七人である。私とガイドのアザーさん以外、モンゴル旅行は初体験である。

借り上げのワゴン車でウランバートル市街に向かい、アザーさんの案内で鍋料理の店に行く。店は日本風を意識した造りになっていて、神社のような不思議な構えの個室が用意されていた。壁には北

斎の浮世絵が飾ってある。鍋料理といっても一人用の小さな鍋で、豚骨やら栗膳やらのスープからそれぞれに好みものを選び、その中に皿に盛られた肉を入れて食べる韓国式のものである。モンゴル人は、一つの鍋を皆でついたりするような食べ方は好まないのだそうだ。

遅い夕食を終えると、ウランバートル中心部のスフバートル広場近くに昨年開業したというホテルにチェックイン。細かい部分に難点はあるものの、最新の設備が整った二十四階建ての近代的なホテルだった。

ハンホンゴル村へ

翌日、昼過ぎの便で南ゴビ県ダランザドガドの空港に着くと、かつてのハンホンゴル芸術専門学校校長、現在は南ゴビ県の教育局に在職し県内の学校の指導に当たっているポルト先生が待っていた。彼の二人の娘、エンヒエマーとジャガーも成長した姿を見せてくれた。正面玄関を出れば、三年前の旅でドライバーを務

めてくれたマンダツハの懐かしい顔も。前回は名前を思い出せなかったことで気分を害してしまったので、「マンダツハ！」と大きな声で呼んだ。マンダツハは「おう、覚えていてくれたな」とばかりに、分厚い手で力強く握手してくれた。いつもと変わらぬロシア製四駆ワゴン

に荷物を積み込むと、まずは昼食をとるため町のレストランへ。ここでは、アザーさんお薦めのモンゴル焼うどんを注文する。出来上がるのを待つ間に、アザーさんが気を利かせて冷蔵庫からビールを出してきてくれた。南ゴビの暑い午後、乾いた気候にビールは最高である。けれど、ビールを飲み出した私たちに気付くや否や店員が慌てて近付いてきて、困

り顔で「ビールはだめだ」と言う。これまでも幾度か同じような目に会っているので「また禁酒デー？」と思ったが、ガイドのアザーさんが気付かなかったのはなぜなのだろう。店員によれば、南ゴビでは毎週水曜日が禁酒デーなのだそうだ。この条例は地域によってまちまちで、

ウランバートルであれば月に一回(朔日)となっている。アザーさんはウランバートル在住なので、南ゴビの条例を知らなかったようだ。警察官に見つかれば罰金でもある。それでも残してしまつてはビールがかわいそうだ。急ぎ飲み干して、ビンを片づけてもらった。

昼食後は町のザツハ(市場)とスーパーに寄ってミネラルウォーターや菓子などを買い込み、ハンホンゴル村へ向かう。マンダツハの運転の腕前は相変わらず切れ味抜群で、舗装されていない大草原の中の一本道を最高時速百キロで村へ走る。でこぼこに応じたこまめなブレーキ

ングやハンドルのさばきは、アスファルトで舗装された道路ばかり走っている私たちには到底真似などできない神業だ。アザーさんと私は初めての草原走行。こんなドライブは経験したことが無いから、車が跳ねるたびにワアワア、キヤアキヤアとにぎやかなことこの上ない。村の中心部に着くと、よろず屋と呼ぶにふさわしい、村でただ一軒の店に寄り、

ヨーグルト味の手作りアイスキャンディーを食べて休憩。禁酒デーだが、久しぶりの日本からの客ということで、ビールとアルヒ（モンゴルウオッカ）をこっそり売ってもらう。

いよいよ目指すゲルキャンプだ。村の中心から十五分ほど車に揺られるとゲルが見えてきた。手前の二棟は私たちのためのゲル。百メートルほど離れた所にもう二棟。こちらは、お世話になる遊牧民の暮らすゲルである。



山羊の乳

今回の四泊五日、ハンホンゴル村滞在でお世話になったのは、五人家族の遊牧民一家である。

父親のトクトホ、母親のオユントヤ、それに長男のバートル（二十一歳）、次男のトグシン（十七歳）、三男のエンフトル（十一歳）の五人で力を合せて暮らしている。所有しているのは、三百頭あまりの山羊と二十頭ほどの馬である。山羊の毛は重要な現金収入源だ。夏の間は

山羊や馬の乳を搾って馬乳酒や山羊酒、チーズなどを作っている。特別に山羊の酒の作り方を見せてもらったところ、素材を生かし切った製法でまったく無駄が無いことに感心させられた。

原料は山羊乳酒。馬乳酒と同じやり方で、山羊の乳を数日間かき混ぜて軽く発酵させて造った、アルコール度三パーセント程度の飲み物。それを大鍋に入れて火にかける。燃料は乾燥した馬糞だ。大鍋の上から紐で小さな鍋を吊るし、その上に水を張った洗面器状のものを被せ、

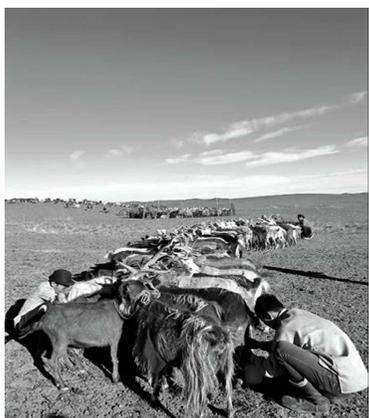
隙間を濡れた布で密閉する。弱火でゆっくりと煮立てられて蒸発したアルコール分が、上部の水に冷やされて小鍋にぼたぼたと落ちる仕掛けだ。

出来たての山羊酒をご馳走になる。ちようど日本酒ほどのアルコール度数だろるか。軽い甘さのあるさっぱりした飲み口の酒だ。匂いはほとんど気にならない。メンバーの女性たちはすっかり気に入って、何度もお代わりをしていた。ほろ酔い気分のカオルは、日本から持ってきた衣装を身に着け、お得意のフラメンコを披露する。ハンホンゴル村のゲルの中でフラメンコを踊ったのは、カオルが日本人初だろう。トクトホ一家はフラメンコを間近に見て大喜びで、踊りが終わるとやんやの喝采が起きた。音楽関係の仕事をしているバーバラも持参のピアノカを吹き始め、その横でユキさんやマツちゃん、美味しい、美味しいと山羊酒を味わっている。昼間から宴会のようになってしまった。

山羊の酒造りに話を戻そう。酒造りの

後、大鍋の底に残ったものも無駄にはしない。良質のたんばく質が残ったどろどろの白い液体は、布に包んでゲルの外にぶらさげられ、水気が抜けるとチーズになる。オユントヤが形を整え、糸で器用に切り分けて箱に載せていく。それをゲルの屋根の上で日に当てて乾燥させれば、長い冬のための貴重な保存食となる。乾燥したものは山羊の乳特有の匂いが強くなるが、できたてのチーズは臭みがありなくて食べやすい。

山羊の乳搾りは朝夕二回行われ、一日



に三十リットルほど搾るといふ。乳搾りをするために、放牧中の母山羊を息子たちが馬に乗って集める。子山羊は母山羊から離れまいと必死だが、息子たちは巧みな手綱さばきで母と子を別れさせ、母山羊だけを集める。集められた母山羊は、オユントヤが一本のロープで瞬く間に繋いでいく。搾乳しやすいように、二列に向き合った母山羊の首と首とを、向かい合わせにして交互に繋ぐ。繋がれた母山羊の数を数えたら、なんと百六頭。搾乳はすべて手作業だからたいへんだ。子山羊を囲いの中に入れて終えてから、搾乳が始まる。母子で黙々と乳を搾る。山羊の尻を頭で軽く押さえながら無駄なく次々に乳を搾っていく様に、神聖なものを見ているような感覚を覚えた。

このように乳を搾るわけだが、当然のことながら乳は子山羊のためにある。搾り切らずに残した分は子山羊のものだ。「搾取」という言葉は、乳の横取りが語源なのかもしれない。乳搾りを終えると、母山羊たちの首のロープがほどかれる。



そこへ囲いから解放された子山羊たちが殺到する。子山羊のかん高い「メエメ

エ」の声と、母山羊の少し低音の「メエメエ」の声が入り混じる。双子の子山羊が何組もいて、母山羊と子山羊を合わせれば二百五十頭ほどになるだろうか。山羊の親子が、我が子、我が母を探し合う。母山羊が見つかった子山羊は母山羊の腹の下に潜り込み、鼻先で二度三度、乳房を思い切りつついてから乳を飲む。母山羊がなかなか見つからずに探し回ったり、母親ではない山羊の乳を吸おうとして蹴飛ばされたりする子山羊もいる。

「メエメエ」の大合唱、走り回る山羊の砂ぼこり、母の乳房を激しくつつく音や乳を吸う音。すべてが入り混じった草原が、ゆつくりと夕日に包まれていく光景は荘厳なものに感じられた。

温かく優しい遊牧民一家

トクトホ一家は、実に温かく優しい家族だった。

長男のバートルは、遊牧民としての生活を引き継ぐらしい。父親のトクトホによれば、遊牧の仕事は向き・不向きがあ

るから、いちばんこの仕事を継ぐのに合っていると思われる子どもに継がせるのだそう。バートルは長男だからという理由からではなく、三人の息子の中で最も遊牧の仕事に向いているのだと考えているようである。次男のトグシンはハシホンゴル芸術専門学校で馬頭琴を学び、九月からはウランバートルの大学で馬頭琴奏者を目指して新たなスタートを切る。ゲルで演奏を聴かせてくれた時には、音楽家らしい情熱を内に秘めた好青年という印象だったが、後で記すように意外な一面もある好青年だ。

末っ子のエンフトルは、表情豊かで愛くるしい少年。素直で賢く、純粹な心の持ち主であることがすぐに伝わってきた。一方で、ひとたび馬にまたがれば、やはりたくましい大草原の子もだ。

私たちが着いた翌日、エンフトルは詩を暗唱してくれた。馬乳酒が注がれた銀の器を両手で持ち、ゴビの自然の豊かさや人の心の温かさなどが散りばめられた長い詩は、私たちを歓迎する気持ちを表

母さん」だ。家族でいちばんの働き者。恥ずかしがり屋だが、とにかく笑顔が素敵だ。

その笑顔に魅入られ妻にしたのが、一つ年下のトクトホである。トクトホは、とにかくシャイだ。遊牧民一家の長であればもう少し堂々としていても良いのではないかと思うのだが、口数が少なく威張ったりしない。みんなが大笑いしている、声を立てるでもなく静かに笑っている。そんなシャイなトクトホとオユントヤは、どのようにして出会ったのだろう。メンバーの一人が興味関心を押さえ切れずに「どうやって知り合ったんですか」と尋ねた。トクトホは訥々と話し出した。

南ゴビでは、祭りの時に出会った人とモンゴル式のジャンケンをし、負けると酒を飲み干すという風習があるという。それを利用して、オユントヤにジャンケンを申し込んで負け、酒を飲み干したのがお付き合いの始まりだったとか。シャイなトクトホが、年上のオユントヤにジ

ャンケンを申し込んでいる姿を想像すると、なんとも微笑ましい。

モンゴル式ジャンケン大会

さて、そのモンゴル式ジャンケンだが、食事を終えたゲルでのジャンケン大会が忘れられない思い出となった。

モンゴル式ジャンケンには、五本の指のうち一本だけを出し合う。互いに出した指の組み合わせで、勝負が決まる。親指は人差し指に勝ち人差し指は中指に勝ち：小指が親指に勝つというように、三すくみが五すくみになっただけで、基本的にはグーチョキパーのジャンケンと同じルールだ。

こんな単純な遊びでも、周囲に何も無い草原のゲルの中では大人も子どもも関係なく、大騒ぎの勝負となる。ゲルに集まったのは総勢一六人。二つのチームに分かれて、ジャンケンをし合う。負けたチームのメンバーは全員、馬乳酒か山羊酒を一杯ずつ飲み干さなければならぬ厳しいルールだ。けれども気がつけば、

すものだそう。暗唱を終えると、彼は手にした器の馬乳酒を飲み干した。なんのてらいもなく歓迎の意を表してくれたのだが、やはり緊張したのだろうか。馬乳酒の器を置くときとほっとしたような表情を見せた。



母親のオユントヤは、寡黙で働き者の四十一歳。絵に描いたような「遊牧民のお

酒に弱い人にはさりげなく少なめに注いでいる優しいトグシンの姿があった。

このゲームでは、音楽家を目指す次男のトグシンの意外な一面が見られた。勝負となると、とにかく激しいのである。勝てば周囲を見渡し「おー！」と声を発しながら拳を突き上げる。負ければ悔しさを前面に出して床の絨毯を叩く。これがあの繊細な馬頭琴の曲を弾いていた青年と同一人物かと驚きかつあきれた。まあそれはそれとして、この気合が功を奏して、トグシン擁する私たちのチームは快勝を続けた。

ところが、トグシンなど眼中にないような様子で戦う人が一人だけいた。母親のオユントヤだ。物静かで奥床しいモンゴル女性だと思っていた私たちの目に映ったのは、誰を相手にしてもまったくひるまず果敢にジャンケン勝負をするオユントヤの勇姿だった。ジャンケン巧者のポルト先生との対戦では、ポルト先生が「オレの勝ちだ」と勝利宣言したが、オユントヤは一步も引かずにもすごい

迫力で何やらまくし立て、「私の勝ちよ」と宣言。さすがのポルト先生も引き下がった。トグシンも、母親との対戦では気合が入らず、オユントヤが変則的な動きで繰り出す拳に何度も敗れて、悔しうに絨毯を叩いていた。

モンゴル相撲とバレー対決

今回の旅はポルト先生のお骨折りのおかげで、南ゴビを堪能するフルコースの内容となった。

ハンホンゴル村滞在四泊五日のうち、二日目は砂丘へのドライブ、三日目は南ゴビ随一の名所ヨリナム渓谷での乗馬体験。そして四日目はお祭りだ。小規模だがナーダム(モンゴルの祭り)が開かれるので行ってみようということになり、競馬とモンゴル相撲の観戦に出かけた。このナーダムは、ハンホンゴル村の

前村長であるサインボイン氏が主宰するもので、彼の親戚を中心にたくさんの人が集まって祭りを楽しんでいた。二歳馬から四歳馬の十二キロのレースを車で追走してもらって観戦。ひと休みしたら次は一歳馬の八キロレースだ。さすがに一歳馬となると、ゴール付近では



力尽きてしまうのだろう。まっすぐに走れないくらいのはたばたした動きだ。それでも騎手の子ども達は、必死に鞭を当ててラストスパートをかける。小さなナーダムとはいえ、一位の商品はバイクである。必死になるのも無理はない。

レースが終わると、ポルト先生から「それぞれのレースの五位までの騎手の子どもたちに、日本人からも賞金を渡してほしい」と言われた。表彰式が進むと「ユージさん、ユージさん」という放送の声が聞こえ、入賞した騎手一人一人に、賞金の五千トウグリグ札をメンバーのみんな

などで手分けして渡した。日本円にすれば二百五十円ほどのわずかな賞金だが、子ども達は嬉しそうだった。そうこうしているうちに、ついさっきまではしゃいでいたムードメーカーのミドリが、急に元気をなくしてしまった。どうやら、暑い日差しの下でのナーダム観戦で熱中症になってしまったようだ。相撲観戦は止めにして近くのゲルで休んでから、キャンプに帰ることにした。

帰って一休みしていると、バレーボールで遊ぶ声が聞こえた。熱中症だったはずのミドリが、トグシンたちとバレーボールで遊んでいる。やはり若者は回復が早い。

モンゴル人はバレー好きが多い。ポルト先生の次女のジャガーは、中学校の全国大会に出場した経験があるそうだ。こちらにも強力なメンバーがいる。ミドリは高校時代にセッターだったし、マツちゃんもバレー経験ありだ。そこで、日本対モンゴルの親善試合をしようということになった。日本チームはミドリ、マ

ツちゃん、私にアザーさん。モンゴルチームは、三人兄弟にジャガーが加わる。ネットなどない草原でのバレーボールだ。お互い、なんとなくのルールで、ゲームが進行していく。三セットマッチの結果は、二対一でモンゴルチームの勝利。平均年齢十六歳の若いチームに、平均年齢三十八歳チームは善戦むなしく敗れた。

その後はモンゴル相撲に挑戦。バレーの雪辱を果たすべく、音楽家志望のトグシンなら勝てそうな気がして指名。そこそこ良い相撲にはなったとは思うが、やはり子ども頃馬に乗り足腰を鍛えている青年は強い。悔し紛れに「ちゃんと食べていけば負けなかった」と言った。実際に私は、ハンホンゴル村に着いてからずっと胃腸の調子が悪く、三日間もスポーツ飲料しか受け付けられない状態だった。ちゃんと食べていけば間違いなく勝ったはずだと、大人気無い負け惜しみを繰り返した。

次の対戦相手である長男のバトトル

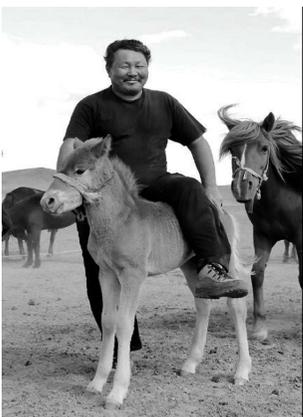
は、組んだ瞬間「ああ、負けた」と直感できるほど腰回りの筋肉が盛り上がっていた。案の定、あつという間に倒されてしまった。ちゃんと食べていても歯が立たなかったことを素直に認めざるを得ない。

名勝負だったのは、運転手のマンダツハとガイドのアザーさんの取り組みだ。マンダツハは若い頃、モンゴル相撲では村の小結だったこともあるという実力者だ。そんなマンダツハと対等に張り合っていたアザーさん。ジムで鍛え抜いているマツチョドだ。筋肉の塊の二人の勝負は延々と続き、二十分も戦っただろうか。勝負がつかず引き分けになった。モンゴル相撲には引き分けはなく、一時間かかろうと二時間かかろうと延々と勝負が続くのだが、夕食の準備を手伝うというマンダツハを引き留めておくわけにもいかない。また機会があれば、続きを見たいものである。もしバイクが賞品ともなれば、きつとマンダツハの力は倍増するだろう。

マンダツハはスーパーマン

マンダツハは、相撲だけでなくなんでもできるタフガイである。運転技術は抜群、モンゴル料理の腕前も相当なもので、お得意の肉の蒸し焼き料理、ホルホックはメンバーみんなに大好評だった。ただのタフガイではなく、仔馬に跨る姿を写真に撮ってほしいと言うようなお茶目なところもある。

ハンホンゴル芸術専門学校の用務を担当し、校用車の運転から校舎内の修繕や塗装、校庭の整備など多彩な仕事をしている。古タイヤを使ったミニ花壇、ペッ



トボトルを細かく裂いて作った箒。数年前には校舎の玄関近くに岩を積み上げ、井戸水を利用した滝を作ってしまった。繊細な仕事から力仕事まで、すいすいとこなしていくスーパーマンである。滞在三日目に、南ゴビの観光名所であるヨリンアムへ行く途中、私たちの乗っているロシア製四駆が故障した。ラジエーターから水が漏れているらしい。運転手のマンダツハは車を停めてエンジンの点検を始めた。乗り心地は悪いが、故障しても修理が可能なのがロシア製四駆だ。電子部品を使っておらず、いたってシンプルな作りだから、自動車修理の知識と工具さえあれば直せるのである。モンゴルの大草原では、車が故障しても修理できないと命取りになることもある。優れた運転手は、優れた自動車整備工でなければならぬ。なにしろ冬はマイナス三十度にもなる大地だ。車の故障は命に関わる。

マンダツハは運転席のシートを外に放り出し、その下にあるエンジンルーム

を見回す。おもむろにファンベルトを外し、ラジエーターをのぞき込む。水の減ったラジエーターに新しい水を注ぎ込むと、水漏れの穴をすぐに見つけて穴埋め用のパテを練り出す。二種類のパテをペットボトル片で練り、硬化が始まるまで少し時間を置いてから、指につけたパテでラジエーターの細い管に空いた穴を器用に塞ぐ。私の指の二倍はありそうな太い指で、どうしてこんなに細かな作業ができるのだろう。ファンベルトを元通りにし、シートを固定して、その後の作業は終了。その間、およそ三十分。Tシャツに汗の滲みだしたマンダツハの背中が頼もしかった。

マンダツハの太い指の器用さをさらに見せつけられたのが、モンゴル式知恵の輪だ。ヨリンアムの往復で、休憩中にマンダツハが骨らしきものにナイフで穴を開けていた。それに気付いてはいたが、何をやっているのか分からなかった。ヨリンアムからキャンプ地に戻ってゲルの外で涼しい風に当たって休んでいると、

マンダツハが山羊の脛の骨を持ってきた。その骨には、糸に山羊のくるぶしの骨を二つ、離れた位置に通したものがついていて、その二つを一か所に揃えればよいという簡単な仕組みの知恵の輪だと説明する。けれども見た目とは裏腹に、これがとても難しい知恵の輪で、私はいくらやっても二つを一方にそろえることができなかった。

そんな私を見て、マンダツハはにやにや笑いながら私の手にある知恵の輪を取り上げて、瞬く間に二つを揃えてしまう。そして自分の頭を人差し指で指し、「オレの方が、お前より頭がいい」とアピールするのだ。悔しいが、認めざるを得ない。私には知恵の輪を解く知恵だけでなく、故障した車を直す技術も無いし、モンゴル相撲で勝つ力も無い。まったくもって、マンダツハには脱



帽である。因みにこの知恵の輪だが、若い娘がこれを解ければお嫁に行ける、と言われているそうだ。知恵と器用さを兼ね備えているからという理由なのだろう。パーバラとミドリはこの知恵の輪に熱中し、最初にパーバラ、続いてミドリが解いてしまった。ミドリは「浦野さんには無理かなあ」と、マンダツハのようににやにや笑う。まだ独身のバトトルの嫁に、置きざりにしてしまおうかという考えが、ふと頭の隅をよぎった。

ン樹脂で精巧に作られた恐竜に人が近づくとき、首を振り回したり声を上げたりして、ホンモノさながらの動きを見せてくれる。南ゴビは恐竜化石の聖地だ。パヤンザクという砂漠地帯からは、今も次々に恐竜の化石が発見されている。それにしても、である。これだけの設備を作って採算が取れるのだろうかとか心配になった。ポルト先生に聞くと、数年のうちに南ゴビまで鉄道が伸びてくると言う。近年になって、南ゴビでは地下資源が次々に見つかっている。それを運ぶための鉄道である。モンゴルで最も人口密度の低い南ゴビ県だが、鉄道が開通する頃には、ダランザドガド周辺の人口は大幅に増え、遊園地を訪れる家族が大勢見られるようになるに違いない。そして、経済的にも景観的にも、南ゴビは大きな変貌を遂げることだろう。その時の人々の心がどのように変化してしまうのか、あるいは変わらないままであるのか、いくつか確かめてみたい。

中心街を外れた土地に忽然と現れた遊園地を見て、目を疑った。昨年、中国資本によって造られたらしい。メリーゴーラウンドに観覧車、子どもを乗せて園内を走るかわいい列車もある。奥へ進むと、ジュラシックパークさながら、実物大の恐竜たちが点々と鎮座している。シリコ

「草が疎らに生える土地」を意味する

「ゴビ」。そのゴビで、疎らに生える草を山羊に食べさせ、その山羊たちからカシミヤとよばれる毛と乳を頂き、慎ましく生活する人々。そんな彼らにも、近い将来、便利で楽しい都市生活の誘惑が迫ってくるだろう。その時、彼らは何を選び、どんな生活をしているのだろう。

そうそう、マンダツハの弱点のことだった。せつかく遊園地に来たのだから観覧車に乗ろうということになりマンダツハにも声をかけると、「乗らない」といへば、「なぜ乗らないのか」と尋ねると、高い所が怖いのだそう。そう

いえば、ハンホンゴル村には二階建てより高い建物はどこにも無い。おそらく三階以上の高さの所に上がった経験が無いマンダツハには、四十メートル近い高さの観覧車に乗るなど有り得ないことなのだろう。ハンホンゴル村を代表するタフガイ、スーパーマンのようなマンダツハにも意外な弱点があることが分かり、彼への親しみはさらに深まった。マンダツハには、いつまでも観覧車に乗れない人

でいてほしいような気がした。

バットウンスレンとの別れ

ハンホンゴル村を訪問する度に、いろいろな形でお世話になってきた遊牧民のバットウンスレンが亡くなった。昨年十月に心臓病でこの世を去ったそう。私の今回の旅の目的の一つは、バットウンスレンの家族にお悔やみの気持ちを伝えること。救急車を呼ぶことはもとより、病院で適切な治療を受けることさえ難しい遊牧生活では、日本なら助かる命も助からない場合が少なくない。

最愛の妻と四人の子どもたち、そして三人の孫など、たくさん素敵な家族を残して旅だったバットウンスレン。どんなにか無念なことだろう。彼はこのモンゴル紀行に幾度も登場してきた大切な友人であると共に、モンゴルの遊牧生活をたくさん教えてくれた師匠でもある。南ゴビの大地にしっかりと根を下ろして一家の遊牧生活を仕切るたくましさ、妻や義父母に常に優しく接している姿に、出

会った時から尊敬の念を抱いていた。彼とまた会う日を楽しみにしていたのだが、実に残念だ。



重たい気持ちでバットウンスレンのゲルを訪問すると、バットウンスレンの孫の少女が走り寄ってきた。「タムラ？」と声をかけると、うんうんと嬉しそうにうなづく。初めて出会ったのは、彼女がまだ一歳の乳飲み子の頃。今は笑顔のはじける中学生である。

ゲルに入り、奥さんにお悔やみの言葉を伝える。三年前に撮った彼の素敵な笑顔の写真を奥さんに渡すと、彼女は涙を流した。大好きだったアルヒを向こうで

も楽しんでもらおうと、日本から持参した「津軽びいどろ」のぐいのみグラスを遺影にお供えし、ゲルを出た。ゲルの外には、バットウンスレンが大切に育てていたラクダがたくさん集まっていた。

チャツアルガンクッキー

終わりに、チャツアルガンという果実について触れておきたい。チャツアルガンは直径五ミリから十ミリほどのグミ科の果実で、色はオレンジ色。モンゴルでは黄金の果実とか奇跡の果実などと呼ばれている。日本ではサジーとも呼ばれ、ビタミンやミネラル他、豊富な栄養素を含む。

ガイドのアザーさんは、彼の本業である食品関係の仕事のひとつとして、そのチャツアルガンの果汁を生地に練り込んだクッキーを開発している。彼は、日本人向けの土産として高級志向のクッキーにしたいと言う。開発途上のクッキーだが、出張でモンゴルを訪れたビジネススマンに売れ始めているそうだ。

彼の作ったチャツアルガンのクッキー

を、お土産に購入して帰国した。職場で試食してもらおうと評判は上々。私も食べてみたが、なかなか美味しい。旅の仲間達も皆、お土産に買って帰った。ただ残念なのは、箱も包装もシンプル過ぎて、モンゴルのお土産らしさがあまり感じられなかったことだ。

帰国後、マツちゃんやユキさん達が、ラインでチャツアルガンクッキーの土産としての価値をさらに高めるためのアドバイスを伝えた。私も、私なりのアドバイスを伝えた。その数日後には、改善した内容が分かる画像がアザーさんから送られてきた。私たちの意見を取り入れてチャツアルガンクッキーの箱に入れることにしたという、二枚のカードの画像だ。カードにはそれぞれ、チャツアルガンの画像と説明、クッキーの説明が書かれていた。さらにより良くするため、今後改善策を考えていくそうだ。彼の行動力に、今回の旅のメンバー全員が驚かされた。

モンゴル人のバイタリティーとチャレンジ精神は計り知れない。夢と希望にあふれる若いアザーさんのようなモンゴル人たちが、これからのモンゴルをさらに発展させていくに違いない。



続く